

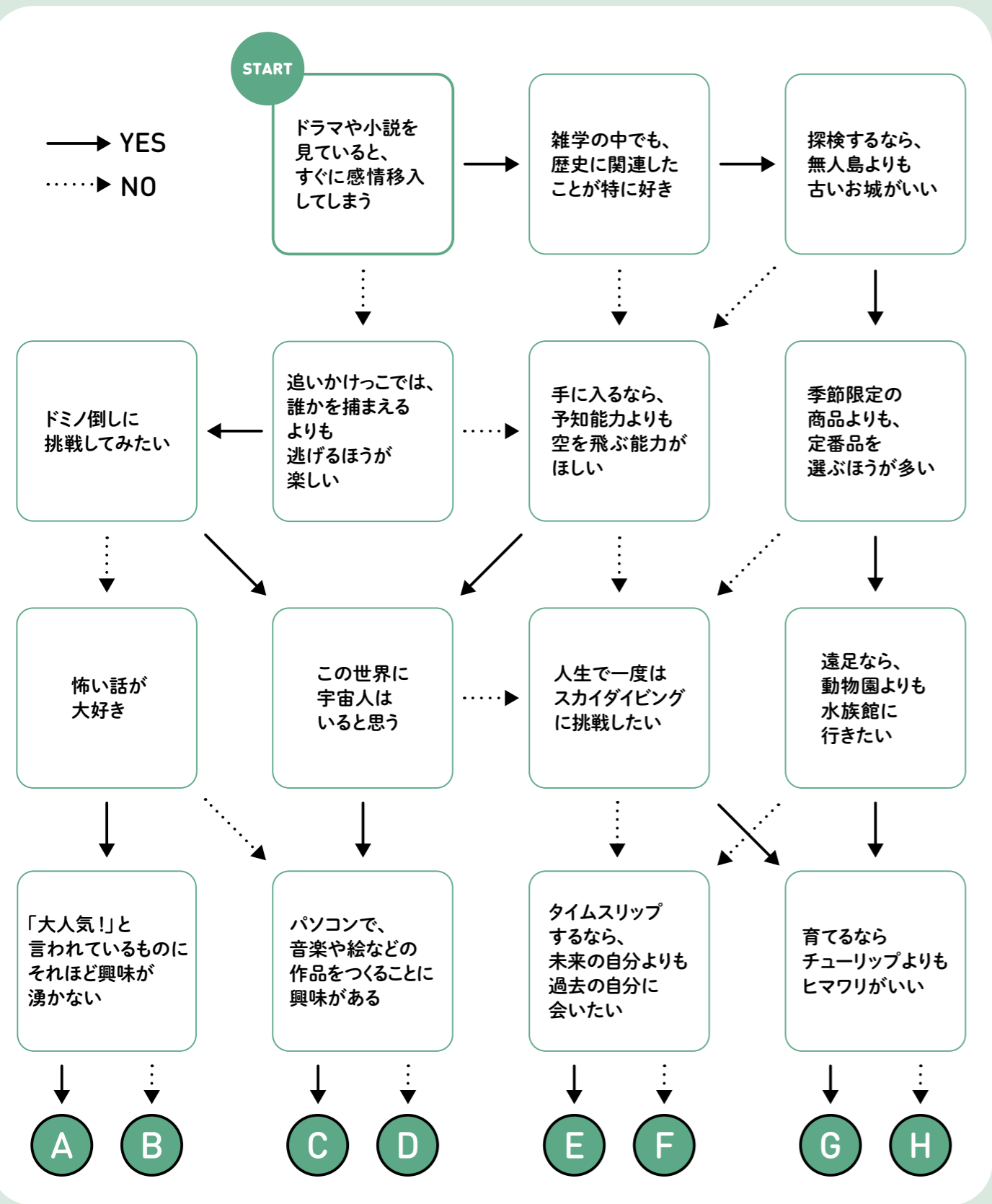
音楽診断

第15回 名作映画音楽編 洋画編

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第15弾。
今号は名作と呼ばれる8本の映画から、
あなたにおすすめの映画音楽をご紹介します。



監修・解説 = 小沼純一
Text = Junichi Konuma



あなたにぴったりの映画音楽は？

A モダンジャズの効いた新たなサスペンス
『死刑台のエレベーター』
(1958年/フランス)
作曲:マイルス・デイヴィス

ある殺人事件が都市にひろげる波紋。
ラッシュ・フィルムをみながら、最小限の決めご
とのみでなされる即興演奏。ストーリーのみでなく、
映像と音楽もあわせてのサスペンスが、ここに生まれ
た。音楽は20世紀音楽史上はずすことのできな
いマイルス・デイヴィス(1926-1991)。映画の新しい
潮流、ヌーヴェル・ヴァーグ*とジャズとが結びつ
き、都市の孤独、若者の無節操、クルマのスピードが
結びつく。*フランスで起こった映画運動



B 軽快なサウンドが楽しい西部劇
『荒野の七人』
(1960年/アメリカ)
作曲:エルマー・バーンスタイン

黒澤明監督作品『七人の侍』(1954)を、開拓時代
のメキシコに移した西部劇。
ヴァイオリンのあかるく勇壮なメロディー、バツ
クの木管・金管・打楽器のリズム、金属系打楽器の
きらきらしたアクセント。音楽はエルマー・バー
ンスタイン(1922-2004)。「ウエストサイド・スト
ーリー」を作曲、指揮者としてよく知られたレナード・
バーンスタインとは別人なので要注意。『大脱走』
(1963)も有名。



C 壮大な物語と大編成オーケストラ・サウンド
『スター・ウォーズ』
(1977年~/アメリカ)
作曲:ジョン・ウィリアムズ

ハリウッド本流の活劇をSFに移しかえた成功作。
かつてエーリヒ・コルンゴルド(1897-1957)
という作曲家がいた。オーストリアで神童と呼
ばれる作曲家だが、ユダヤ系だったためアメリカ
に亡命。映画音楽の作曲家となった。そのサ
ウンドがジョン・ウィリアムズ(1932-)の手で、
1970年代のSF活劇に、ヴァージョン・アップし
た迫力で、復活する。キャラクターそれぞれに
音楽が割りふられているのも特徴だ。



D 世界中から愛されるキャラクターと名曲
『ピノキオ』から「星に願いを」
(1940年/アメリカ)
作曲:リー・ハーライン

ディズニー・アニメーションから生まれたスタンダー
ド・ナンバー。
イタリアの作家カルロ・コッローディの名作『ピノキ
オの冒険』をもとにしながら、かなり変更を加え、ディ
ズニーがアニメ化したのは1940年。曲はコロロギのジ
ミー・クリケットがはじめとおわりに歌う。ポピュラー/
ジャズのスタンダードとして現在もさかんに演奏されて
いる。リー・ハーライン(1907-1969)は初期ディズニー
アニメの音楽を多く担当した人物として知られる。



E 人に寄り添う旋律と物語
『ニュー・シネマ・パラダイス』
(1988年/イタリア=フランス)
作曲:エンニオ・モリコーネ

映画そして映画館がかって持っていた輝きと夢
を描きだすドラマ。
映画のストーリーをもちりたて、効果をつくりだす
だけではなく、映画をみるひとに寄り添い、なかには
いりこんでゆく音楽がある。エンニオ・モリコー
ネ(1928-2020)は全篇で、みるひとにとって、映像
と音楽が切り離しがたくなる映画 = 音楽を生みだ
している。ことばにならない、愛すること——故郷
を、映画を、ひと、を、そっと教えてくれながら。



F 広く知られたシンセサイザーの音楽
『炎のランナー』
(1981年/イギリス)
作曲:ヴァンゲリス

走ることの意味と価値のちがいを浮き彫りにする
スポーツドラマ。
オーケストラでも、バンド演奏でもない、シンセ
サイザーを中心に据えてひびかせた音楽は、この映
画のテーマ曲をとおり、広く知られるようになった。
折しもテクノ・ポップなどもクローズアップされ
た時期である。ヴァンゲリス(1943-2022)は翌1982
年、まったく異なったタイプのSF映画『ブレッドラン
ナー』でも、電子的なサウンドを全篇でひびかせた。



G 音楽で彩られた異色の恋愛ドラマ
『シェルブールの雨傘』
(1964年/フランス=西ドイツ)
作曲:ミシェル・ルグラン

恋愛と家庭、社会、手元のお金——音楽に包まれて。
甘美なメロディー、ジャジーなリズム、色彩ゆたかな
サウンド。何度もくりかえしあらわれるテーマ。芝居のセ
リフがすべて歌われるのがオペラ、要素要素でうたが
はいつてくるのがミュージカル。それらが総合され、切
れ目なく音楽がひびいている画期的な映画。背景に
あるアルジェリア戦争がもたらす傷も重要。映画監督
ジャック・ドゥミ(1931-1990)と作曲家ミシェル・ルグ
ラン(1932-2019)のコンビによる記念碑的作品。



H 人間ドラマと豊かなオーケストラ
『風と共に去りぬ』から「タラのテーマ」
(1939年/アメリカ)
作曲:マックス・スタイナー

南北戦争で変化する人びとを描く巨篇。
テーマ冒頭、ヴァイオリンが奏する幅広い音程
が、映画が描きだすアメリカ南部の広大さと呼応す
る。メロディーのうごきにすこし遅れてホルンの高
音域が、この立体感を強調。アメリカ史の一端をみ
てとることもできる一大叙事詩だ。マックス・スタ
イナー(1888-1971)はオーストリア出身、アメリカに
わたり、『キング・ kong』(1933)、『カサブランカ』
(1942)などの映画の音楽も手掛けた。



小沼純一

音楽を中心にしながら、文学、映画など他分野と音とのかかわりを探る批評をおこなう。現在、早稲田大学文学学術院教授。批評的エッセイとして『本を弾く
来るべき音楽のための読書ノート』『武満徹追憶』『音楽に自然を聴く』『映画に耳を聴く』から始まる新しい映画の話』ほか、創作に『sotto』『しっぽがない』
『ふりかえる日、日 めいのレッスン』ほか。編著に『武満徹エッセイ選』『高橋悠治対談選』『ジョン・ケージ著作選』『柴田南雄著作集 I~III』ほか。2015-6年
にはシンガポール、ソウル、東京でおこなわれた国際交流基金主催のコンサート『村上春樹を「聴く」』の監修もおこなった。NHK Eテレ『schola(スコラ) 坂本
龍一 音楽の学校』(2010-2014)のゲスト講師としても出演。